

ウイルス感染で発症するがん

がん社会 を診る

中川 恵一

乳方法の工夫によって感染を大幅に減らせることが分かっています。

母乳による感染を抑え、一時は消滅に向かうと考えられたこのウイルスの感染者数はあまり減っていません。人の移動により首都圏などではむしろ増加傾向にあり全国的な対策が必要になっています。

またHTLV-1は感染者の母乳のほか精液中にも存在するため、性行為に伴う「水平感染」が今後、問題になる

とみられます。

ATLはHTLV-1の感染から40年以上という長い年月をかけて発症しますから、高齢者に多い病気です。母乳による感染から性行為による感染にシフトすれば、さらに発症年齢の高齢化が予測されます。

この連載でも何度も取り上げていますが、性行為によるウイルス感染で発症するがんの代表が子宮頸(けい)がんです。子宮頸がんは最も早期の上皮内がんを含めると30〜40歳代にピークがあり、20歳代でも珍しくありません。

の働きが抑制されることで発症します。感染からがんの発症までには10〜20年の年月を要しますが、ATLと比べれば「潜伏期間」は短いといえます。

HTLV-1に対するワクチンはありませんが、HPVについては予防接種法に基づき「定期接種」の対象となっています。HPVの感染を予防するこのワクチンも、すでに感染したウイルスを排除する効果はありません。このため「セックスデビュー」の前の接種が有効で、子宮頸がんの発症リスクは1割まで下がることも確認されています。

前回、ヒトT細胞白血病ウイルス1型(HTLV-1)によって発症する成人T細胞白血病(ATL)を取り上げました。このウイルスは縄文人に特徴的な感染症と考えられています。ATLが沖縄や南九州でよく見られるのは縄文人の末裔(まつえい)が多いためでしょう。

このウイルスの主な感染ルートは母乳を介する「垂直感染」です。しかし現在、妊婦健診でウイルスの有無がチェックされ、陽性の場合でも授



イラスト 中村 久美

作る特殊なたんばく質によって2種類の「がん抑制遺伝子」

カニズムによって異なります。子宮頸がんの場合、性交渉に伴って感染したヒトパピローマウイルス(HPV)が

わが国でも小学6年生から高校1年生の女子は無料で接種できますが、副反応をめぐる騒動で接種率は低迷したまま。先進国のなかで子宮頸がんの罹患(りかん)率が例外的に増えています。

親の世代が十分理解したうえで子どもに接種を促す必要があると思います。

(東京大学特任教授)